

野球のけん制球に関する研究 ——右腕投手からのけん制死を中心に——

功力 靖雄

A Study on the Pick-off Throw in Baseball —Centering on the Putout by Right Handers' Pick-off Throw—

Yasuo KUNUGI

Abstract

Upon totalizing and analyzing the right handers who went the full nine innings on 176 games in The Shuto Baseball League during the last ten seasons extended for five years from spring 1981 to autumn 1985, the following points have become known.

1. The chance of pick-off throw from a pitcher are supposed effective 6 to 8 times with a runner on the first base, 0 to 1 time with runners on the 1st and 3rd bases, 1 to 2 times with runners on the 1st and 2nd bases, 4 to 10 times with a runner on the second base and 0 to 2 times with a runner on the 3rd base.
2. No significant interrelation was recognized in any of the cases between the putout by pick-off throw from a pitcher and the size in the loss of scores.
3. The putout ratio by pick-off throw from a pitcher proved to be 1.4% with a runner on the first base, 0.0% with runners on the 1st and the 3rd bases, 2.4% with runners on the 1st and the 2nd bases, 0.7% with a runner on the 2nd base and 1.3% with a runner on the 3rd base.

In short, since the ratio of putting out the runners on the bases by pick-off throws from a pitcher proved to be 2.4% even at the maximum value with the runners on the 1st and the 2nd bases, it was suggested that the strategy should rather be converted to the contrivance and the correction for preventing any easy base steals rather than to the effort paid to the increase in the putouts by pick-off throws.

Key words : Baseball · Right Handers · Putout · Pick-off Throw

I 緒 言

高校球児の総決算である真夏の甲子園予選では、将来性の豊かな本格派投手が優勝目前

の準決勝レベルで、相手の執拗な『足攻』によって乱調となり、脆くも敗退していく事例が幾度も見聞される。

大学野球でも、1～2点勝負の大接戦では、セフティバントや盗塁、ヒットエンドランなどを絡めた多様な機動力を駆使して¹⁾、投手の投球リズムを狂わせ、攻略の突破口を切開くのがセオリーとなっている。

それらの『ゆさぶり戦法』のうちでは、盗塁が最も有効な攻撃手段であり²⁾、出塁すれば瞬時に得点圏へ進出できるので、守備側は防御の仕組みが根底から破壊され、その攻防はワンサイドとなっている³⁾。

一般に、盗塁の成功は捕手の弱肩を強調するが、殆どは投手のけん制の未熟さから投球動作の癖を見抜かれ発達されている⁴⁾。

また、投手の投球腕からも若干の差異が認められ、二盗の阻止に左腕投手はかなり優位な立場にあるといわれる⁵⁾。

一方、右腕投手は投手集団の8割強もの大多数を占めており⁶⁾、訓練次第では巧妙なけん制テクニックと素早いクイックモーションで、強気な二盗攻撃に十分対応できる⁷⁾。

塁上の走者をけん制する意図には、(1)離塁の巧拙をチェックする (2)走者を刺殺する (3)相手の攻撃作戦を察知する (4)打者の集中力を殺ぐなどが挙げできる⁸⁾。

したがって、完投勝利をめざす投手には、卓越した投球術の修練だけでなく、走者へのけん制技能の錬磨も極めて重要な側面となってクローズアップされよう。

そこで本論文は、投手からのけん制の概要を、けん制死を中心に解明しようと取り組んだ次第である。

II 目 的

公式戦における具体的な攻防の記録より、投手からのけん制場面を類型化して、そのけん制機会とけん制死の程度を明らかにし、より組織的なけん制技法の上達・向上に寄与せんとするものである。

III 方 法

1 対象

研究対象のゲームは、首都大学野球連盟の1981年春季から1985年秋季リーグ戦まで、過去5ヵ年・10シーズンにわたる、全348試合に先発し9イニングを完投した右腕投手の176ゲーム(失点内訳は完封ゲームが55、失点1は52、失点2は33、失点3は17、失点4は10、失点5は6、失点6は3)である。

2 分析資料

完投した右腕投手のゲーム経過を克明に整理するにあたっては、首都大学野球連盟で作成した公式スコアカードを使用した。

3 処理

右腕投手のゲーム分析にあたっては、失点の大小を走者の占有度、けん制機会の出現頻度、けん制比率、けん制死、けん制刺殺率などの観点から統計的手法を用いて整理した。

IV 結果と考察

1 走者の占有度

(1) 塁上の走者数と失点の関係

ア 完投ゲームでの塁上の走者数は、最小値が失点0の1名であり、最大値は失点3の31名であった。

イ 失点0での平均値は 11.58 ± 4.71 であり、失点1は 13.29 ± 4.39 、失点2は 14.88 ± 4.45 、失点3は 16.35 ± 5.70 、失点4は 18.80 ± 3.43 、失点5は 22.50 ± 1.89 、失点6は 24.33 ± 3.40 となっていた。

ウ 図1は、1試合あたりの塁上の走者数と失点の大小との関係を示しているが、失点に比例して塁上の走者数も顕著に増加しており、有意な相関関係が認められた($r=0.988$ $P<0.01$)。

これより、先発して9イニングの完投をめざすタイプの投手は、セットポジションの投球姿勢からでも、windアップやノーwindアップ投法と同等の球威や制球力を実戦で発揮できるよう、十分に習熟すべき重要性

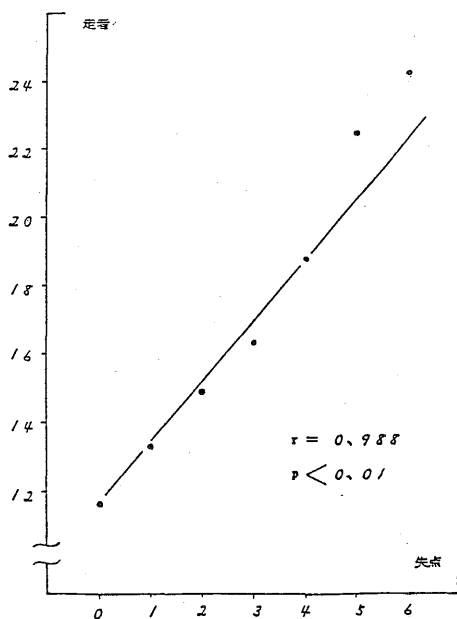


図1 走者と失点の関係

が明らかとなった。

(2) 有走者の状況と失点の関係

走者がゲーム中に塁上を占有する場面は、走者1塁、走者2塁、走者3塁、走者1・2塁、走者1・3塁、走者2・3塁、走者満塁の7通りに分類でき、アウト数も無死、一死、二死の3段階に分けられるので、そのケースは全体で21種類に細分化できる。

図2は、走者が塁上を占有する場面を、ケース別に失点0と失点6で比較したものである。

ア 無死1塁では、失点0の平均値が1.98±1.29であり、失点1は2.02±1.20、失点2は2.09±1.08、失点3は2.47±1.68、失点4は2.10±0.83、失点5は3.17±1.07、失点6は2.67±0.47となって、走者数と失点の間には有意な相関関係が認められた($r=0.767$ $P<0.05$)。

イ 一死1塁では、失点0の平均値が1.89±1.27であり、失点1は1.98±1.31、失点2は2.21±1.12、失点3は1.76±1.16、失点4は

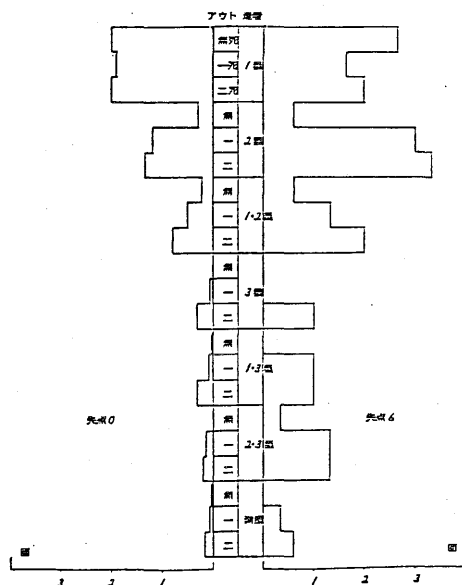


図2 失点0と失点6の走者の占有場面での比較

2.10±1.37、失点5は1.67±0.75、失点6は1.67±1.70であって、走者数と失点との間に有意な相関は認められない。

ウ 二死1塁では、失点0の平均値が1.98±1.17であり、失点1は1.58±1.10、失点2は2.06±1.37、失点3は1.82±0.92、失点4は1.40±1.11、失点5は2.50±1.80、失点6は2.00±0.82であって、走者数と失点との間に有意な相関は認められない。

エ 無死2塁では、失点0の平均値が0.29±0.49であり、失点1は0.38±0.59、失点2は0.36±0.54、失点3は0.53±0.70、失点4は0.30±0.46、失点5は0.50±0.50、失点6は0.67±0.94であって、走者数と失点との間に有意な相関は認められない。

オ 一死2塁では、失点0の平均値が1.20±1.05であり、失点1は1.77±1.07、失点2は1.03±0.90、失点3は1.47±1.09、失点4は2.40±1.11、失点5は2.50±1.61、失点6は3.00±0.00となって、走者数と失点の間には有意な相関関係が認められた($r=0.860$ $P<0.05$)。

カ 二死2塁では、失点0の平均値が1.35±

1.10であり、失点1は 1.64 ± 1.29 、失点2は 1.55 ± 1.28 、失点3は 2.00 ± 0.91 、失点4は 2.10 ± 1.30 、失点5は 1.50 ± 0.96 、失点6は 3.33 ± 1.25 であって、走者数と失点との間に有意な相関は認められない。

キ 無死3塁では、失点0の平均値が 0.00 ± 0.00 であり、失点1は 0.04 ± 0.19 、失点2は 0.09 ± 0.29 、失点3は 0.06 ± 0.24 、失点4は 0.10 ± 0.30 、失点5は 0.00 ± 0.00 、失点6は 0.00 ± 0.00 であって、走者数と失点との間に有意な相関は認められない。

ク 一死3塁では、失点0の平均値が 0.07 ± 0.26 であり、失点1は 0.15 ± 0.36 、失点2は 0.27 ± 0.51 、失点3は 0.53 ± 0.70 、失点4は 0.30 ± 0.46 、失点5は 0.50 ± 0.76 、失点6は 0.00 ± 0.00 であって、走者数と失点との間に有意な相関は認められない。

ケ 二死3塁では、失点0の平均値が 0.33 ± 0.51 であり、失点1は 0.58 ± 0.74 、失点2は 0.52 ± 0.70 、失点3は 0.82 ± 0.92 、失点4は 1.00 ± 1.00 、失点5は 1.67 ± 1.37 、失点6は 1.00 ± 0.82 となつて、走者数と失点との間には有意な相関関係が認められた($r = 0.816$ $P < 0.05$)。

コ 無死1・2塁では、失点0の平均値が 0.22 ± 0.41 であり、失点1は 0.27 ± 0.56 、失点2は 0.55 ± 0.86 、失点3は 0.59 ± 0.91 、失点4は 0.40 ± 0.49 、失点5は 0.67 ± 0.75 、失点6は 0.67 ± 0.94 となつて、走者数と失点の間には有意な相関関係が認められた($r = 0.830$ $P < 0.05$)。

サ 一死1・2塁では、失点0の平均値が 0.51 ± 0.60 であり、失点1は 0.58 ± 0.66 、失点2は 0.70 ± 0.83 、失点3は 0.94 ± 0.94 、失点4は 1.40 ± 0.66 、失点5は 1.33 ± 0.75 、失点6は 1.33 ± 0.47 となつて、走者数と失点の間には有意な相関関係が認められた($r = 0.938$ $P < 0.01$)。

シ 二死1・2塁では、失点0の平均値が 0.80 ± 0.84 であり、失点1は 0.75 ± 0.96 、失

点2は 1.18 ± 0.97 、失点3は 0.88 ± 0.76 、失点4は 1.00 ± 1.00 、失点5は 1.33 ± 1.11 、失点6は 2.00 ± 0.82 となつて、走者数と失点の間には有意な相関関係が認められた($r = 0.814$ $P < 0.05$)。

ス 無死1・3塁では、失点0の平均値が 0.02 ± 0.13 であり、失点1は 0.10 ± 0.29 、失点2は 0.09 ± 0.29 、失点3は 0.18 ± 0.51 、失点4は 0.10 ± 0.30 、失点5は 0.33 ± 0.47 、失点6は 0.00 ± 0.00 であって、走者数と失点との間に有意な相関は認められない。

セ 一死1・3塁では、失点0の平均値が 0.07 ± 0.26 であり、失点1は 0.31 ± 0.46 、失点2は 0.15 ± 0.36 、失点3は 0.12 ± 0.32 、失点4は 0.80 ± 0.87 、失点5は 0.33 ± 0.47 、失点6は 1.00 ± 0.82 であって、走者数と失点との間に有意な相関は認められない。

ソ 二死1・3塁では、失点0の平均値が 0.31 ± 0.57 であり、失点1は 0.31 ± 0.50 、失点2は 0.33 ± 0.53 、失点3は 0.35 ± 0.48 、失点4は 0.60 ± 0.66 、失点5は 0.33 ± 0.75 、失点6は 1.00 ± 0.00 であって、走者数と失点との間に有意な相関は認められない。

タ 無死2・3塁では、失点0の平均値が 0.00 ± 0.00 であり、失点1は 0.00 ± 0.00 、失点2は 0.03 ± 0.17 、失点3は 0.12 ± 0.32 、失点4は 0.10 ± 0.30 、失点5は 0.17 ± 0.37 、失点6は 0.33 ± 0.47 となつて、走者数と失点の間には有意な相関関係が認められた($r = 0.920$ $P < 0.01$)。

チ 一死2・3塁では、失点0の平均値が 0.15 ± 0.35 であり、失点1は 0.21 ± 0.49 、失点2は 0.48 ± 0.78 、失点3は 0.47 ± 0.78 、失点4は 0.80 ± 0.75 、失点5は 1.17 ± 0.37 、失点6は 1.33 ± 1.25 となつて、走者数と失点の間には有意な相関関係が認められた($r = 0.973$ $P < 0.01$)。

ツ 二死2・3塁では、失点0の平均値が 0.20 ± 0.48 であり、失点1は 0.27 ± 0.52 、失点2は 0.45 ± 0.61 、失点3は 0.29 ± 0.45 、失

点4は 1.30 ± 1.55 、失点5は 1.83 ± 1.34 、失点6は 1.33 ± 1.25 となって、走者数と失点の間には有意な相関関係が認められた($r = 0.860$ $P < 0.05$)。

テ 無死満塁では、失点0の平均値が 0.02 ± 0.13 であり、失点1は 0.02 ± 0.14 、失点2は 0.03 ± 0.17 、失点3は 0.12 ± 0.32 、失点4は 0.00 ± 0.00 、失点5は 0.17 ± 0.37 、失点6は 0.00 ± 0.00 であって、走者数と失点との間に有意な相関は認められない。

ト 一死満塁では、失点0の平均値が 0.05 ± 0.23 であり、失点1は 0.13 ± 0.34 、失点2は 0.33 ± 0.64 、失点3は 0.41 ± 0.84 、失点4は 0.30 ± 0.64 、失点5は 0.50 ± 0.76 、失点6は 0.33 ± 0.47 となって、走者数と失点の間には有意な相関関係が認められた($r = 0.769$ $P < 0.05$)。

ナ 二死満塁では、失点0の平均値が 0.15 ± 0.35 であり、失点1は 0.21 ± 0.45 、失点2は 0.36 ± 0.59 、失点3は 0.41 ± 0.69 、失点4は 0.20 ± 0.40 、失点5は 0.33 ± 0.47 、失点6は 0.67 ± 0.94 であって、走者数と失点との間に有意な相関は認められない。

ニ 走者が各塁上を占有する機会は、1試合あたり無死1塁が2～3回、一死2塁や二死1塁、二死2塁が1～3回、一死1塁が2回程度、二死1・2塁が1～2回、二死3塁や二死2・3塁が0～2回、一死1・2塁が1回程度、無死2塁や無死1・2塁、一死3塁、一死1・3塁、一死2・3塁、一死満塁、二死1・3塁、二死満塁が0～1回は出現していたと思われる。

ヌ 無死3塁や無死1・3塁、無死2・3塁、無死満塁の場面は、ゲーム中に殆どみられなかったと思われる。

2 けん制場面の類別

離塁中の走者を、投手からのけん制球で刺殺の可能な場面は、味方内野陣の守備隊形によって、次の5タイプに類型化できる。

タイプ1 一塁けん制

一塁走者の二盗やバント、ヒットエンドラン攻撃などに備えて、一塁手を塁ベースに待機させる場合で、無死1塁、一死1塁、二死1塁、二死1・3塁の4ケースがある。

タイプ2 一・三塁へのけん制

スクイズや二盗、ヒットエンドラン攻撃などに備えて、三塁手と一塁手が各塁ベースでけん制球を待つ場合で、無死1・3塁、一死1・3塁の2ケースがある。

タイプ3 一・二塁へのけん制

一・二塁間の守備範囲をより拡大させるため、一塁手が一塁走者の背後を守る場合で、一・二塁のいずれにもけん制は可能である。とくに後位の一塁走者は、油断から投手と内野手のサインプレイにより刺殺されやすい。このケースには二死1・2塁、二死満塁の2通りがある。

タイプ4 二塁けん制

三盗や大きな離塁から本塁生還を未然に防ぐ場合で、無死2塁、無死1・2塁、一死2塁、二死2塁、一死1・2塁、二死2・3塁の6ケースがある。

タイプ5 三塁けん制

本盗やスクイズ攻撃などに備えて、三塁手を塁ベースに待機させる場合で、無死3塁、一死3塁、無死2・3塁、一死2・3塁、無死満塁、一死満塁の6ケースがある。

なお二死3塁の場合は、奇襲戦法の本盗を警戒するだけで、直接に三塁ベースへけん制の必要はなく、打者との対決に全力を傾注できるので、この場面のみ、けん制球の対象から除いた。

3 けん制機会の出現頻度

(1) 一塁けん制の機会と失点の関係

ア 完投ゲームにおける一塁へのけん制機会の最小値は完封の1回であり、その最大値は失点2の15回であった。

イ 失点0での平均値は 6.16 ± 2.57 であり、

失点1は 5.89 ± 2.61 , 失点2は 6.70 ± 2.61 ,
失点3は 6.41 ± 2.25 , 失点4は 6.20 ± 2.18 ,
失点5は 7.67 ± 2.13 , 失点6は 7.33 ± 2.05 と
なっていた。

ウ 図3は、投手からの一塁けん制の機会と失点の大小との関係を示しているが、失点の増加につれほぼ大となっており、有意な相関関係が認められた($r = 0.773$ $P < 0.05$)。

したがって、投手からの一塁けん制の機会は、1試合あたり6~8回(毎回、走者へのけん制球は何度でも執拗に投げ続けられる)であった。

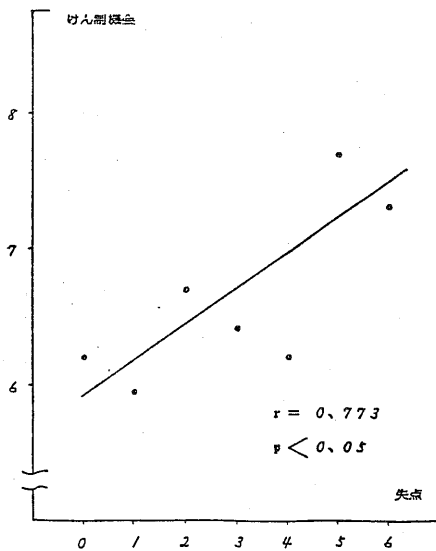


図3 一塁へのけん制機会と失点の関係

(2) 一・三塁へのけん制機会と失点の関係

ア 一・三塁へのけん制機会の最小値は0回で、完投ゲームの75.6%もの多数を占めており、最大値は失点3の3回であった。

イ 失点0での平均値は 0.09 ± 0.29 であり、失点1は 0.40 ± 0.60 , 失点2は 0.24 ± 0.49 , 失点3は 0.29 ± 0.82 , 失点4は 0.90 ± 0.94 , 失点5は 0.67 ± 0.47 , 失点6は 1.00 ± 0.82 となっていた。

ウ 一・三塁へのけん制機会と失点の大小との間には有意な相関関係が認められた($r =$

0.871 $P < 0.05$)。

エ 一・三塁へのけん制機会は、1試合あたり僅かに0~1回であった。

(3) 一・二塁へのけん制機会と失点の関係

ア 一・二塁へのけん制機会の最小値は0回で、完投ゲームの35.2%にみられ、その最大値は失点1の5回であった。

イ 失点0での平均値は 0.95 ± 1.00 であり、失点1は 0.96 ± 1.11 , 失点2は 1.54 ± 1.13 , 失点3は 1.29 ± 1.07 , 失点4は 1.20 ± 1.17 , 失点5は 1.67 ± 1.11 , 失点6は 2.67 ± 0.47 となった。

ウ 一・二塁へのけん制機会と失点の大小との間には、有意な相関関係が認められた($r = 0.808$ $P < 0.05$)。

エ 一・二塁へのけん制機会は、1試合あたり1~2回であった。

(4) 二塁けん制の機会と失点の関係

ア 二塁けん制の機会の最小値は完封の0回であり、その最大値は失点6の13回だった。

イ 失点0での平均値は 3.76 ± 2.59 であり、失点1は 4.90 ± 2.30 , 失点2は 4.64 ± 2.32 , 失点3は 5.82 ± 2.83 , 失点4は 7.90 ± 1.97 ,

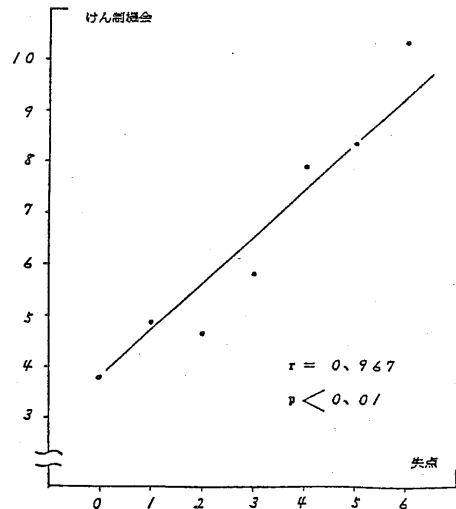


図4 二塁へのけん制機会と失点の関係

失点5は 8.33 ± 1.25 、失点6は 10.33 ± 2.05 であった。

ウ 図4は、投手の二塁へのけん制機会と失点の大小との関係を示しているが、失点の増加に比例して、その機会も大となる傾向にあり、有意な相関関係が認められた($r = 0.967$ $P < 0.01$)。

これにより、投手からの二塁けん制の機会は、1試合あたり4~10回であった。

(5) 三塁けん制の機会と失点の関係

ア 三塁けん制の機会の最小値は0回で、完投ゲームの半数を占める49.4%にみられ、その最大値は失点2の6回であった。

イ 失点0での平均値は 0.29 ± 0.53 であり、失点1は 0.56 ± 0.72 、失点2は 1.24 ± 1.37 、失点3は 1.71 ± 1.32 、失点4は 1.60 ± 1.28 、失点5は 2.48 ± 1.26 、失点6は 2.00 ± 2.16 であった。

ウ 三塁けん制の機会と失点の大小との間には、有意な相関関係が認められた($r = 0.925$ $P < 0.01$)。

エ 三塁けん制の機会は、1試合あたり0~2回であった。

4 けん制比率の失点別変化

ア 総てのけん制機会に対する一塁けん制の占める比率は、失点0が53.2%、失点1は44.3%、失点2は45.0%、失点3は39.2%、失点4は33.0%、失点5は34.1%、失点6は30.1%であった。

イ 図5は、投手の一塁へのけん制機会の比率と失点の大小との関係を示しているが、ここでは失点の増加に反比例して一塁へのけん制機会は小となり、一塁けん制の占める比率と失点の大小との間には、負の相関関係が認められた($r = -0.961$ $P < 0.01$)。

ウ 三塁けん制の比率では、失点0が2.5%、失点1は4.2%、失点2は8.3%、失点3は10.5%、失点4は8.5%、失点5は11.1%、

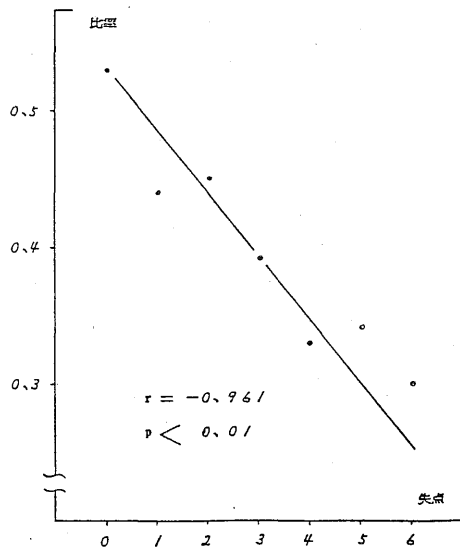


図5 一塁へのけん制機会の比率と失点の関係

失点6は8.2%となって、1割前後の低率ではあるが増加の傾向にあり、三塁けん制の比率と失点の大小との間にも、有意な相関関係が認められた($r = 0.761$ $P < 0.05$)。

エ しかし、二塁けん制の場合は失点0が32.5%、失点1は36.9%、失点2は31.2%、失点3は35.6%、失点4は42.0%、失点5は37.0%、失点6は42.5%であり、一・二塁へのけん制の場合も失点0が8.2%、失点1は7.2%、失点2は10.4%、失点3は7.9%、失点4は6.4%、失点5は7.4%、失点6は11.0%となっていた。同様に、一・三塁へのけん制も失点0が0.8%、失点1は3.0%、失点2は1.6%、失点3は1.8%、失点4は4.8%、失点5は3.0%、失点6は4.1%となり、いずれも比率と失点の大小との間には、有意な相関関係が認められなかった。

オ これからも、投手が力投して最小の失点に防ぐほど、一塁へのけん制テクニックの巧拙が、続投への決め手となってクローズアップされてくることがわかった。

5 投手からのけん制死

表1は、投手からのけん制死の具体的な内

表1 投手からのけん制死の実態

No.	年度	投手 (大学)	失点	プレイ	カウント	死数	回	得点経過	場面	走者
1	56春	S (G)	0	1-6	1~2	2死	1裏	0対0	二塁	一番S S
2	々	S (E)	0	1-3	1~0	無死	7裏	5対0	一塁	一番2 B
3	56秋	T (G)	0	1-6	2~/	1死	9裏	6対0	一・二塁	四番C
4	々	E (H)	0	1-6	0~0	1死	6表	0対0	一・二塁	六番C
5	々	I (Q)	0	1-6	2~/	2死	9裏	8対0	二塁	六番1 B
6	々	T (G)	0	1-3	0~0	2死	2表	0対0	一塁	五番R F
7	57春	W (G)	0	1-3	1~0	2死	3裏	0対0	一塁	一番L F
8	57秋	S (G)	0	1-6	1~0	1死	4表	1対0	二塁	五番R F
9	58春	T (G)	0	1-6	2~2	2死	2裏	1対0	一・二塁	八番S S
10	58秋	E (H)	0	1-3	0~0	2死	5表	0対0	一塁	一番2 B
11	59秋	M (B)	0	1-5	0~0	1死	4表	1対0	三塁	七番C F
12	60春	H (F)	0	1-3	2~/	1死	1表	0対0	一塁	二番S S
13	56秋	E (H)	1	1-3	0~/	無死	6裏	0対0	一塁	四番C F
14	々	E (H)	1	1-3	1~/	1死	8裏	0対0	一塁	三番R F
15	々	E (H)	1	1-6	1~/	1死	2表	0対0	一・二塁	六番C F
16	々	T (F)	1	1-3	1~0	2死	5裏	0対1	一塁	二番S S
17	57春	N (D)	1	1-3	1~/	1死	2表	0対0	一塁	六番3 B
18	59春	S (F)	1	1-4	0~0	無死	3表	0対1	一・二塁	一番L F
19	57秋	T (G)	2	1-5	1~0	1死	4表	0対1	三塁	六番C
20	58春	E (H)	2	1-3	1~0	無死	4表	0対0	一塁	三番1 B
21	60春	K (F)	2	1-3	0~2	2死	3表	1対1	一塁	九番P
22	56秋	E (H)	3	1-3	0~0	1死	3表	1対0	一塁	七番1 B
23	59秋	H (F)	3	1-6	0~/	1死	1表	0対0	二塁	二番2 B
24	60秋	H (F)	3	1-3	1~0	1死	2表	0対0	一塁	五番L F
25	々	H (F)	3	1-3	0~/	2死	8表	0対3	一塁	四番R F
26	59春	H (F)	4	1-6	2~2	2死	1表	1対3	二塁	六番C F
27	々	H (F)	4	1-3	0~0	無死	9裏	4対4	一塁	四番L F
28	57春	S (A)	6	1-4	1~/	1死	6表	0対4	二塁	一番2 B

容を示したものである。

(1) けん制死の特徴

ア 投手からのけん制死は完投176ゲームで、走者一塁の場面が15、一・二塁が5、二塁が6、三塁が2となり、全体で28個みられた。
 イ 一塁でのけん制死の9割は、同点又は1点差のクロスゲームになって、盗塁やヒットエンドランの好機にあるとき、2球目までの早目の投球カウントで、走者の右足に荷重された一瞬の逆を突かれ刺殺されていた。

ウ 二塁でのけん制死は、一死では1ストライク、二死では2ストライクとなって刺殺されるケースが目立った。

エ 三塁でのけん制死は、仕掛けの早いスクイズ攻撃が看破され、必殺のけん制球を送られたものと思われる。

オ けん制死のチーム別傾向では、1部リーグ延8大学のうち、3チームの投手陣に8個平均で集中しており、けん制球に対する意欲・認識の相違が歴然とみられた。

(2) 各けん制死と失点の関係

ア 投手からのけん制死の最大値は2個であり、失点1・3・4に各1回みられ、その最小値は0個であって、全体の85.8%もの多数を占めていた。

イ 一塁走者のけん制死は、失点0での平均値が0.09±0.29であり、失点1は0.08±0.33、失点2は0.06±0.24、失点3は0.18±0.38、失点4は0.10±0.30、失点5は0.00±0.00、失点6も0.00±0.00となっている。

ウ 二塁走者のけん制死は、失点0が0.11±0.31であり、失点1は0.04±0.19、失点2は0.00±0.00、失点3は0.06±0.24、失点4は0.10±0.30、失点5は0.00±0.00、失点6は0.33±0.47となっていた。

エ 三塁走者のけん制死は、失点0が0.02±0.14であり、失点1は0.00±0.00、失点2は

0.03±0.14、失点3～6は0.00±0.00であった。

オ 投手からのけん制死と失点の大小の間には、一塁走者・二塁走者・三塁走者のいずれにも、有意な相関は認められなかった。

(3) 投手からのけん制刺殺率

図6は、1試合あたりの各けん制機会と投手からのけん制刺殺率(けん制死/けん制機会×試合数)を、けん制場面ごとに失点の大小から比較したものである。

ア 一塁走者のけん制刺殺率は1.1%であった。それも、走者一塁での場面にのみ1.4%認められた。

イ 一・三塁へのけん制では、投手の三塁への偽投を警戒して、いずれの走者もけん制死を記録していない。

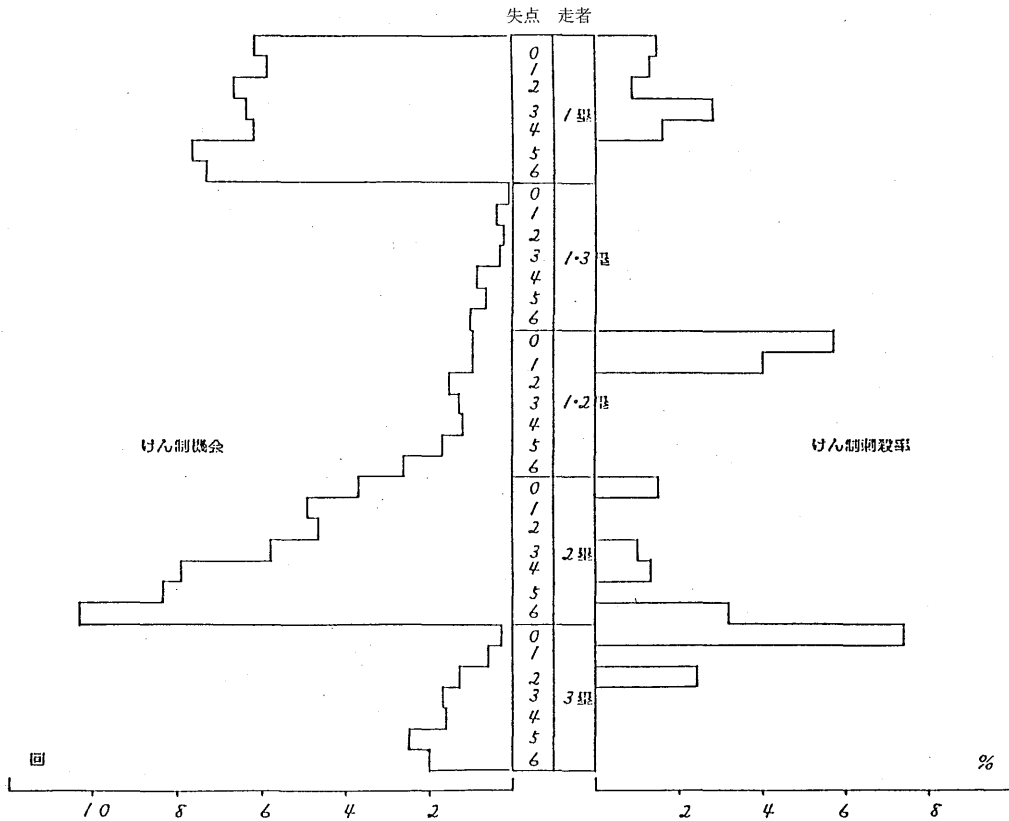


図6 1試合あたりのけん制機会、けん制刺殺率と失点の関係

また、走者一・二塁の場面でも、一塁走者のけん制死は皆無であった。

ウ 二塁走者のけん制刺殺率は1.0%であった。しかし、一・三塁のベースコーチも集中でき、走者自身も慎重に成り勝ちな走者二塁の刺殺率0.7%より、走者一・二塁で絶好のチャンス到来と思われた直後が、意気込み過ぎか2.4%と3倍強も多くみられた。とくに、無死1・2塁の送りバントの場面では、5.7%もの高率で目立っていた。

エ 二塁走者を刺殺した野手の内訳は、無死1・2塁における犠牲バントの状況で、遊撃手のピックオフプレイ(つり出し)による二塁手・触球のトリック⁹⁾が1例あるだけで、他は二塁走者の背後より近づく遊撃手の刺殺が圧倒的に多数を占めていた。すなわち、二塁走者の刺殺を狙う場合は、二塁手を囮として注意をそらす遊撃手のけん制が、その基本プレイと思われる。

オ 三塁走者のけん制刺殺率は1.0%であった。しかし、一・三塁の場面でのけん制死はなく、無死又は一死3塁でのけん制死が、一塁のけん制死にほぼ近い1.3%認められた。

この場面では、とくにスクイズ攻撃が企図されたとき、下手投げ投手のけん制で刺殺されやすい。

V 要 約

1 ゲーム中に塁上を占有する走者数は、1試合あたり失点3未満の完投ペース¹⁰⁾で12~15名と思われる。

2 走者が各塁上を占有する機会は、無死1塁が2~3回、一死2塁や二死1塁、二死2塁が1~3回、一死1塁が2回程度、二死1・2塁が1~2回、二死3塁や二死2・3塁が0~2回、一死1・2塁が1回程度、無死2塁や無死1・2塁、一死3塁、一死1・3塁、一死2・3塁、一死満塁、二死1・3塁、二死満塁が0~1回は出現するものと思われる。

3 一方、無死3塁や無死1・3塁、無死2・3塁、無死満塁の場面は、ゲーム中に殆どみられなかった。

4 投手からのけん制機会は、1試合あたり一塁けん制が6~8回、一・三塁へのけん制が0~1回、一・二塁へのけん制が1~2回、二塁けん制が4~10回、三塁けん制が0~2回あると思われる。

5 完投ゲームでは走者のけん制機会が全く皆無の場面も多く、一・三塁へのけん制では75.6%がけん制機会0回であり、三塁けん制では49.4%、一・二塁へのけん制では35.2%をも占めていた。

6 投手からのけん制機会と失点の大小との間には、一塁けん制、一・三塁へのけん制、一・二塁へのけん制、二塁けん制、三塁けん制のいずれも有意な相関が認められた。

7 一塁けん制の占める比率と失点の大小との間には負の相関がみられたから、投手の力投で最小の失点に防ぐほど、一塁へのけん制に俊敏さや正確性が強く要求されよう。

8 一塁でのけん制死の特徴は、盗塁やヒットエンドランの好機で、2球目までの早い投球カウントから右足へ荷重された瞬間を突かれている。二塁でのけん制死は、一死では1ストライク、二死では2ストライクとなって刺殺されるケースが目立っていた。

9 投手からのけん制死と失点の大小の間には、一塁走者・二塁走者・三塁走者のいずれにも、有意な相関は認められなかった。

10 投手からのけん制刺殺率は、一・二塁へのけん制が2.4%で最も高く、次に一塁けん制が1.4%、三塁けん制が1.3%で続く。二塁けん制は0.7%と半減しており、一・三塁へのけん制は皆無であった。

11 けん制死の出現率は、完投ペースの目安とする失点2の場合、一塁でのけん制死が11ゲームに1回、一・二塁が27ゲーム、二塁が31ゲーム、三塁が62ゲームに1回ずつ出現すると思われる。ただし、投手からのけん制死

が3チームの投手陣に8個平均で集中していたから、他チームも一様にけん制術の向上を心掛ければ、けん制死の2～3倍アップは十分に期待できよう。

12 しかし、塁上の走者を巧妙・華麗なけん制プレイで刺殺する確率は、その最大値ですら一・二塁へのけん制の2.4%と低率なので、けん制死の増大に過度の労力を注ぐより、容易に盗塁されぬ工夫と技の開発へ発想を転換すべきであり、合理的な考え方を優先する『パーセンテージ・ベースボール』の立場¹¹⁾からも、大きな離塁の抑止こそけん制の本義とわかった。

VI けん制・上達への提言

1 右腕の投手が一塁及び二塁走者をけん制するにあたっては、まずセットポジションの姿勢から素早く左へターンし、野手の触球しやすい塁ベースの左端・膝の高さへ100%送球できるよう訓練すべきである。

三塁へのけん制では、ゆったりした動作から一転して三塁方向へ踏み込み、塁上に送球する技法を身につけたい。

いずれも、静止した体勢から突如として迅速・機敏に、動かぬ標的へ投げ込める技能の習得が先決である。

2 投手が内野手とけん制の連係プレイを練習する場合、基本的なチーム防御の段階では、ピンチの連続が予測される『失点4』のけん制機会の配分、すなわち一塁けん制が7、一・三塁へのけん制が1、一・二塁へのけん制が1、二塁けん制が9、三塁けん制が2、を目安として内野手との動きづくりを開始しタイミングの調整に取り組みれば、総てのけん制機会に対応できると思われる。

3 シーズン中の定期的な点検・復習には、いずれもけん制刺殺率が1%前後であるから、けん制機会の大部分を占める2場面、すなわち一塁けん制と二塁けん制の習熟に限定してよいと判断できる。それも、ややピンチ

の続く『失点3』のごとく、一塁けん制と二塁けん制の配分は1対1での反復練習が望ましい。

4 一塁けん制の主な課題は、ワンパターンでない各種体勢からの意表を突いたけん制の工夫であろう。それには、三塁手や捕手の合図によりけん制する方法も有効と思われ、今後大いに開発していくべきと考える。

一般に、一塁で刺される走者は鈍足ではない。不注意や緩慢な動きよりも、多くは足の速いものが快足を過信しすぎて刺殺されている¹²⁾。とくに、盗塁やヒットエンドランの場面で、二塁へスタートせんとした一瞬を急襲されたケースである。それも、何回か緩急をつけたけん制球ののちに生じていた。

しかし、『パーセンテージ・ベースボール』の立場を優先して、一塁けん制の狙いを走者の刺殺は第二義的なものと考え、容易に離塁をとらさぬことと簡単にスタートさせぬことの2点に専心・留意すべきであろう。

5 二塁けん制では、投手と内野手の多様なフォーメーションの採択(例えば、遊撃手の直接けん制やフェイントけん制、二塁手のつりだしから遊撃手のけん制など遊撃手を中心としたプレイと、二塁手中心の場合がある)と二・遊間とのタイミングの完成であろう。

また、捕手からのサインでけん制する方法にも習熟していく。

一方、複数の走者が塁上を占める一・二塁や満塁の場面では、前位より後位の走者に油断がみられるので、極力サインプレイで後位の走者を狙うようセオリー化したい。

6 三塁けん制は、悪送球や失策で簡単に失点する可能性が強い¹³⁾ので、投球動作からけん制を見極めにくい下手投げの投手を除いて、あまり三塁走者の刺殺を目的とせず、相手ベンチの攻撃意図の察知や打者の集中力の分散を主な眼目にすべきであろう。

7 各塁への基本的なけん制の上達・向上によって、応用的なチーム防御である一・三塁

や一・二塁の、複数走者の占有するけん制場面への波及効果も十分に期待できる。

引用文献

- 1) 功力靖雄：野球の攻撃評価法に関する研究。大学体育研究，7：71～73，1985
- 2) 功力靖雄：野球における失点の抑止に関する研究——右腕投手の投球内容を中心に——。筑波大学体育科学系運動学類・運動学研究，3：58～59，1987
- 3) 功力靖雄：勝つためにいかにうまく戦うか(その3)。月刊高校野球マガジン，3—11：76，1987
- 4) 飛田穂洲：ベースボール・守備編，121～126，飛田穂洲選集刊行会，東京，1960
- 5) 功力靖雄：左腕投手の有利，不利に関する研究。大学体育研究，9：23～26，1987
- 6) プロ野球コミッショナー事務局編：オフィシャル・ベースボール・ガイド 1986，79～82 135～138，共同通信社，東京，1986
- 7) 功力靖雄：勝つためにいかにうまく戦うか(その2)。月刊高校野球マガジン，3—9：65，1987
- 8) 稲葉誠治：投手の育て方——技術と練習の指導——，102～107，ベースボールマガジン社，東京，1974
- 9) 功力靖雄：野球・守備のマニュアル，154～155，成美堂出版，東京，1972
- 10) 前掲書(5)，25
- 11) 岡田実：野球。スポーツ競技の見どころ，日本放送協会編，357～361，日本放送出版協会，東京，1964
- 12) 前掲書(4)，124
- 13) 森茂雄：野球・守備編Ⅱ，253～255，早稲田大学出版部，東京，1954